

## 共通テーマ「2009年スポーツあれこれ雑感」：野球界この1年

著者	金光 興二
出版者	法政大学体育・スポーツ研究センター
雑誌名	法政大学体育・スポーツ研究センター紀要
巻	28
ページ	44-45
発行年	2010-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00007513">http://doi.org/10.15002/00007513</a>

共通テーマ

「2009年スポーツあれこれ雑感」

## 野球界この1年

金光興二

2009年、今年の野球界は2月から3月にかけて行なわれたWBC（ワールド・ベースボール・クラシック）で始まった。

巨人 原監督率いるオールプロ選手のチーム構成で前回大会に続く連覇を目指して戦い、見事決勝で宿敵韓国を破り連覇を達成した。優勝した瞬間はプレーした選手やスタッフのみならず、球場で、ブラウン管で観戦した日本国民全体に感動と勇気を与えてくれました。

日の丸を背負って戦うジャパンチームのプレッシャーは言葉では言い表せないほど大きなものであったと推察します。

私も高校・大学・社会人の現役選手として、また、大学ジャパンのスタッフとして日の丸を背負って戦った経験がありますが、相当なプレッシャーを感じたものでした。

WBCでのイチロー選手を見た時チームリーダーとしてチームの勝利と国民の期待に応えなければならないといった重圧がその表情やプレー振りに表れていました。そのことで、大会終了後に胃潰瘍が判明しメジャーリーグの開幕出場を棒に振ることになるのだが、それほど日の丸を背負って戦うことは名誉ではありますが、相当な責任と重圧が伴うものであり、優勝した瞬間のイチロー選手の喜びと重圧から開放された表情がとても印象的でした。

高校野球も3月の春の選抜大会で球春の幕を開けました。今年の選抜大会決勝は岩手 花巻東高校 菊池投手と長崎清峰高校 今村投手の歴史に残る投手戦となり1対0で清峰高校が初優勝しました。

夏の選手権大会では名門中京大中京高校が最多7度目の全国制覇を果たしました。走攻守にバランスのとれたチームで特に攻撃力は、打球の速さや勝負強さなど目を見張るものがあり、名門復活を印象づけた堂々たる優勝でした。

今年の高校野球は花巻東高校 菊池投手が話題の中心でしたが、普通は何十年に一人といわれるほどの技量をもった選手であればチームメートとの関係がギクシャクするものだが、菊池投手の場合は笑顔の絶えない明るさ、常にチームメートに声をかけている姿、全力プレーなどから、そういった心配が無縁であることを証明していました。夏の準決勝で負けた時、チームメートが菊池投手を抱えて挨拶に向かう光景が映しだされましたが本当に心の通じ合った素晴らしいチームでした。

その後のドラフト会議でメジャーか国内プロかと色々話題になりましたがプロ野球選手として必ず成功すると確信を持つほど人間性豊かな投手でした。

社会人野球は都市対抗野球大会でホンダが前評判通り13年ぶり2度目の優勝を果たしました。スピード・パワー・総合力どれをとってもNo.1にふさわしいチームでした。

ただ、社会人野球は年々企業チームが減っていく状況にあり、今年も日産自動車が休部、TDKがチーム統合される等、社会人野球出身者の私にとっても寂しさと選手の進路機会が狭間っていく状況に一抹の不安を感じます。

企業の経営状況は厳しさが増すばかりではありますが、都市対抗野球の応援合戦や社員の一体感を見るたびに、社会人野球の素晴らしさを感じており企業チームにはこのような時だからこそ頑張ってもらいたい。

さて、大学野球ですが我がチームは春、六大学野球リーグ戦43回目（最多）の優勝、引き続き行なわれた全日本大学野球選手権大会でも14年ぶり8回目（最多）の優勝を果たしました。

監督として7年目のシーズンでしたが、ここ2～3年の低迷で今年は『3Cで覇権奪取！』【Change（チェンジ）＝変革，Concentrate（コンセントレート）＝集中，Continue（コンティニュー）＝継続】のチーム方針を掲げ“何があっても勝つ！”という強い気持ちを持って臨みました。

特にChangeでは「今まで通用していたから」ではなく、もう一度原点に戻り、チームが勝つために変えるべきところは積極的に変えていくよう意識を強く持たせました。それを選手だけに求めるのではなく、監督としてもこれまでのやり方でいいのを見直すことから始め、変えるべきところは大胆に思い切ってチェンジしました。

ひとつあげるならば今まで目指してきた「守りの野球」から「攻めの野球」への転換、「適材適所」など、多少のミスには目をつむって選手の良い面（長所）を引き出すことに徹したことが結果に結びついたと思います。毎年、同じやり方が通用するとは思いませんが、その年その年の選手の特徴（個性）を最大限生かしたチーム作りをしていかなければならないと改めて感じました。

最後に指導者として目指すもの、求められるものについて述べてみたい。

私の指導方針は「勝つこと」これは監督として当然の目標ではありますが、同時に「人間形成」が重要な役目でもあります。野球というスポーツは7割がメンタル面と言われており、人間性を磨くことが勝負に強い（球際に強い）選手になる近道であると考えています。このことは社会にでも必要になってくるものですから、今後も『勝つこと』『人間形成』この二本柱を指導方針として指導にあたっていきたいと考えています。

また、今年11月22日にプロ野球セ・パ誕生60周年を記念して、U-26 NPB選抜 対 大学日本代表の交流試合が行なわれた。今後も野球界全体が発展していくために建設的な意

見交換、交流が図られることを願っており、私自身も協力していきたい。

さらに現在野球部が協力している主に小学生を対象とした「少年野球教室」（現在、野田市・多摩地区・川崎地区で実施、来年1月静岡市にて実施）を積極的に行い、野球界の底辺拡大に全力を尽くしたいと考えています。

以上